

フレンズ 第29号

特別養護老人ホーム
 短期入所生活介護事業
 通所介護事業（3カ所）
 認知症対応型通所介護事業（2カ所）

発行日 平成24年 3月25日
 居宅介護支援事業（1カ所）
 地域包括支援センター（2カ所）
 （世田谷区委託/介護予防支援事業）

介護人材を育てる

— 施設独自の「介護技術検定」で介護現場の再生を —

統括施設長 飯田能子

ハイライト

○巻頭言
 介護人材を育てる
 フレンズ版・技術検定による
 介護現場の再生

○特集
 「介護技術検定」
 フレンズホーム 生活介護課長が
 中心になって進めている介護技
 術検定の実際を、特集しました。

○地域の絆
 「無理せず 気長に 抱え込まず」
 「自分達の見守り」をつくる、
 地域のすばらしい活動のご報告。

目次:

巻頭言	
介護人材を育てる	1
特集	
介護技術検定	2
検定を受けて	3
職員感想文	
連載	
連載 地域の絆⑦	
「無理せず 気長に 抱え込まず」	4

フレンズホームが介護福祉専門学校の
 新卒者を採用できなくなってから4年にな
 る。介護施設の新設ラッシュと相次ぐ
 専門学校の閉鎖や生徒数の減少、それに
 都市部の潜在的な人材難がその要因であ
 る。この間、大学の新卒を採用し、チュ
 ーター制の導入によって介護人材を育成
 してきた。

当ホームでは大卒の新入職員には、入
 職前にヘルパー2級研修の受講を義務付
 けている。新入職員となった彼らは、オ
 リエンテーションで福祉の理念や歴史を
 学んでから、チューターの指導で介護現
 場に立つのであるが、チューターは2、3
 年先輩の職員なので、1対1で行う1年間
 の研修は、双方にとって有意義であるこ
 とを研修ノートから窺うことができる。

いま、国は「今後の介護人材養成の在
 り方に関する検討会報告書」を公にし、
 介護職のキャリアパスとして初任者研修
 （ホームヘルパー2級研修相当）→実務
 者研修→介護福祉士→認定介護福祉士
 （仮称）へとステップアップする道筋を
 提案している。

さて、介護福祉士の取得には、3年の
 実務経験が必要であるが、資格取得者が
 一定の割合を占めているような現場で、
 一体、何が問題となるのだろうか。介護
 事故、感染症の蔓延、身体拘束、そして
 最近もマスコミで大きく報道された虐待
 などは、介護業務に潜むリスクに対し
 て、管理職がどれだけの意識を持っている
 か、その度合いが示されているように
 思われる。

介護業務が多くの場合、密室で行われ
 ること、認知機能や生活機能の低下によ
 る利用者の重度化、人手不足を理由にし

た自己流の介助が組み合わさって、不適
 切な介護が見逃され、介護事故が引き起
 こされる。

当ホームでは介護福祉士の資格の有無
 を問わず、また勤務年数や正規・非正規
 の別を問わず、介護職に「介護技術検
 定」を受検させている。月1回を計画し
 ているが、業務の都合で中止することも
 ある。受検者は、当日、勤務について
 いる職員の中から4、5名が指名され、生
 活介護課長が作成した検定問題（利用者
 の状態像、疾病と障害を前提にして行う
 介助の内容）を直前に手渡される。利用者
 役は課長が務め、施設長と2人の部長
 が判定者であるが、予め模範の介助方法
 が示されるから、介護技術を持っていな
 い管理職でも判定に困ることはない。利
 用者が安心して身体を預けることができ
 る介助は、判定者に容易に伝わるもので
 ある。採点用紙には「自立支援を意識し
 て残存能力を引き出す」介助には高い得
 点が与えられるように工夫されている。

しかし、この検定に合格するのは決して
 楽ではない。平均合格率は30%前後
 なのである。求められる個別ケアのレベ
 ルでなくとも、職員の都合で対応でき
 てしまうところに、実は介護の持つ真の難
 しさが潜んでいる。検定の合否は書面で
 受検者に通知されるが、不合格者には、
 課長によるフィードバックがあり、再
 チャレンジが課せられる。

この検定によってフレンズホームの介
 護現場は、「的確な介護技術」に裏打ち
 され、しかも「技術にとどまらない介
 護」を次代に引き継いでいく育成の手法
 を、いま、ようやく手に入れることが
 できたように思う。



少し前の特養は、介護福祉士養成の専門学校卒業者か、ある程度の経験者が採用されていた。最近はその殆どが未経験者で、「福祉とは」から始まって、実務も一から教育していかなければならない。オムツ交換、トランス、利用者にとって負担の少ない且つ安全な介護を教え、その後はそれぞれの介護者の体格に合わせた介助方法を教えていく。

施設介護はチーム介護であるが、移乗介助のように利用者と一对一の介助も多く、果たして自分の技術が利用者にとって、安全で安楽な介助であるかどうかを確認することはとても難しい。慣れてくれば、次第に基本を忘れ、自己流になっていくのも想像がつく。入職1年間はチューターが付くが、指導役のチューターが外れる頃になると、現場の今が優先され、何となく一人前にされてしまう。そんな現実の裏づけのように、毎月数枚のあざのインシデント報告が上がってくる。利用者は皮膚が弱く、ちょっとした不注意であざが出来てしまうのは事実だが、介護法やマナーは適切なのか、また適切な方法を知識として知っているのか疑問に思った。そして、普段の業務の中に隠れている一つ一つの介護技術を確認し、改善する意味を含めて介護福祉士実技試験さながらにフレンズバージョン介護技術検定試験が始まった。

検定は、毎回、シチュエーションやメインとなる介助を設定し、想定される過程を細分化したものをチェックリストで点数化出来るように作っている。判定者は施設長を始めとする管理職、そして利用者

役を私が務める。私自身が利用者をするることによって、安全で安楽な介護であるかどうか、身をもって知ることが出来る。

幾度か検定を実施しているうちに、丁寧で優しい介護が出来ていても、利用者にとって一番大事な、利用者本人の残存機能を引き出す介助を行っていないという残念な事に気づかされた。残存機能を意識しての介助は介護の入り口で教えられた基本であり、忘れられてしまっただけでは介護技術の向上は期待できない。常に自立を意識し、利用者の気持ちに寄り添った介護を身につける、そして自分の力量を振り返るためにも介護技術検定は大きな役割を担っている。

実施から2年、受験者は皆、真剣に検定に臨んでいるが、我々が予想もしていなかった「想定外の事態」となることも度々あった。判定者がおもわず苦笑する場面や逆に感心すること、未だ合格をもらっていない職員もいるが実は合格が全てではない。フィードバックを受け、納得し、普段の介護に取り入れていく事こそが目的である。それは、介護福祉士実技試験の一発合格にも繋がっていくものだと思う。

実際には、人間相手のことなので思うようにはいかないこともある。それは、介護の奥深さ面白さに繋がっていく。介護技術検定を受けて、気づいた事や改善した事が、いつか必ず役にたつと信じ、そして技術面だけでなく、こんな人に介護されたいと思わせる介護士に育つことを熱望し、介護技術検定は、まだまだ続く。

検定の評価

合格率は35.2%のむずかしさ

介護技術検定は平成22年度4月から行われています。職員の勤務状況、判定者3名の子定の調整等もあるため、初年度が8回、次年度は6回の実施となっています。

採点のチェック項目は、だいたい9から10項目。それぞれ出来具合によって配点が決まっています。A評価7点（B評価の条件をクリアし、さらにプラス面がある）・B評価4点（技術面とコミュニケーションがとれている）・C評価3点（技術面クリア）・D評価1点（技術面で不足している）・E評価-1点（全く出来ていない）この点数を加算して得点を出します。

平成24年度は、実技検定に加え筆記試験も行い、検定をよりよい介護に繋げていく取り組みを、引き続き行っていく計画です。

平成22年度検定の受検者数は延べ39名・合格者14名・合格率35.9%
平成23年度検定の受検者数は延べ32名・合格者11名・合格率34.4%

●2年間の合計受検者数 71名・合格者 25名

2年間の平均合格率 35.2%

●初年度 第1回目の検定はこんな感じで評価していました。

問題	得点	合否	評価
介護度4・離床してトイレ誘導	71	不	自立支援の意識が足りない。
同上	102	合	声かけがはっきりしており利用者に安心感を与える介助。
同上	101	合	優しい介助。やや介助のしすぎみられる。
同上	110	合	動作が少し早いように感じたが全てクリアしている。
同上	58	不	指示書を全く理解していない介助。

介護技術検定は、こうして行われる

- 問題文は、開始5分前に渡されます。

利用者 山口秋子 92歳 介護度5

＜ADL＞

両下肢・・・左膝可動域狭く伸展拘縮進む
 両上肢・・・左前上腕外傷性麻痺のため筋弛緩
 立位不可 支えがあれば座位可能
 意志の疎通・・・簡単な受け答えは可能
 視力・・・右弱視 右空間無視
 ＜傷病名＞ 脳梗塞 認知症
 ＜介護内容＞山口さんは、風邪気味のため居室でおやつを食べます。右手で自力摂取できるため、車椅子に移乗しテーブルにおやつをセットして、水分を用意するため一旦退室して下さい。

- 施設長、副施設長、事務長の3人が判定者



ビデオも回っている！緊張するなあ・・・

- 介助は、お声かけ、あいさつから。

こんにちは！
 ○○です。起きておやつを食べましょうね



- 問題文を思い出し介助していきます。



どっちの視界が
 きれいな
 だけ・・・おやつを置く場所に気をつけないと。

- 後日、合否の判定がスタッフルームに張り出されます。合格でも、不合格でも課長から一人一人に、文書によるフィードバックが行われ、該当者は再受検を指示されます。

緊張で心臓がぼくぼく・・・

私が介護技術検定を初めて受けたときは、緊張のあまりに自分らしい介護が出来ず不合格でした。入室すると中にはビデオカメラが設置されており、施設長、副施設長、部長が審査員。課長が審査員と利用者役として控えている中でのたった数分の出来事に、心臓がぼくぼくと鳴り、にわかに汗も滲んでいたのを覚えています。

検定内容は決して難しい対応の仕方を求められているのではなく、普段の日常の一部から出題されているため、落ち着いて対応すれば不合格になることはありません。ですが、普段から間違った対応の仕方をしていないと、合格になることもありません。検定内容のほかにもどのくらい自分で介護や医療等の知識を深めているか、合否には大きく反映されずとも見られているのではないのでしょうか。

のちに手渡される合否通知を見て合格だったら素直に嬉しいですし、不合格だととても悔しいです。また、試験後は課長から個別対応でフィードバックをしてもらえるので、試験を受けただけの一方通行にはならないで、きちんと見てくれていると感じます。

私は来年に介護福祉士を受験するので、筆記試験の勉強と平行して職場で模擬試験をさせてもらっていると念頭に置きながら、現状に満足せず今後も努力していきたいです。（ケアワーカー K）

声かけの大切さを実感

合否の発表、半ばあきらめていたのですが結果は合格でした。特に利用者様に対する「声かけ」が良かったというのが合格の理由の一つでした。私は介護技術検定と聞いて移乗や食事介助などの身体的な技術のことばかりが頭に浮かんでいました。もちろんそういった知識があるに越したことはありませんが、「声かけ」を決して疎かにしてはならないということをこの検定を通じて学ぶことができました。

もし自分が利用者様の立場だったらこれから自分が何をされるのか、この人（介助者）は何を考えているのか、そういったことが全く分からないのはとても恐ろしいことです。上手な「声かけ」の技術はそういった不安や恐怖を和らげ、同時に相手をより深く知るための助けとなるのではないのでしょうか。検定を通して見えてくることはまだまだたくさんあると思うので、今後も一つ一つを全力で取り組んでいきたいです。（ケアワーカー I）

基本的な部分を見直すきっかけ

入室すると検定員が3人座っている。ビデオカメラがまわり、利用者役は課長である。

この状況だけで緊張する。これまで4回の検定を受けたが、内1回は検定の途中で課題を忘れてしまった。検定は受験開始5分前に、利用者のADLや今から何をやるかの課題が渡される。そこには介護の専門用語も並んでいて、即座に理解し、緊張のなか試験に臨まなくてはならない。

これまでの検定を思い返すと、「意識低下」「血圧低下」などに対応する介護の知識が足りないがために、とても難しかったことに気が付いた。受検後、課長によりフィードバックが行われ、勉強不足なことを思い知らされる。また、入社して2年が経ち、新人であった頃と違い、誰かに介護技術を教わりながら、チェックしてもらいながら介助する機会はほとんどなくなった。だからこそ、介護技術検定は基本的な部分の知識や技術を見直し学習するきっかけになっている。

（ケアワーカー S）

〒154-0002
世田谷区下馬2-21-11
電話 03 (3422) 7211
Fax 03 (3422) 7227
Email info@n-friends.or.jp



であい・ふれあい
地域のささえあい

ホームページもご覧下さい。
<http://www.n-friends.or.jp/>

- 世田谷区下馬2-21-11 Tel 3422-7211(代)
フレンズホーム / フレンズケアセンター
下馬あんしんすこやかセンター
- 世田谷区上馬4-36-9 Tel 5430-8050
デイ・ホーム上馬 上馬あんしんすこやかセンター
- 世田谷区野沢3-25-10 Tel 5486-7400
デイ・ホーム中丸・認知症デイ「ひだまり」
フレンズ介護保険サービス

編集後記

最近の人材育成の悩みの一部に、厳しく指導するとすぐに辞めてしまう社員が多いと聞きます。その様な原因になってしまう理由として、職員間のコミュニケーション不足が考えられます。コミュニケーションは人材育成の上でも、とても大切なことです。

今回の特集の検定では、同職種の職員が皆、同じ条件で平等に受検します。そのことで、自然と連帯感が生まれ、職員同士のコミュニケーションの一環にもなっているように感じました。そういった技術だけでなく、目に見えない大切な部分も、この介護技術検定にはあると思いました。(T)

=連載= リレーエッセイ 地域の絆 ⑦ 「無理せず 気長に 抱え込まず」

立春とはいえ寒さが続く2月6日夜、上馬まちづくりセンターの2階には、51人の熱気があふれていました。あんしんすこやかセンター(以下あんすこ)が主催する地区包括ケア会議「上馬地区の見守りを考える—その2」に参加したのは、地区の民生委員さん、町会関係者、介護保険サービス事業者、医師、大学ボランティアサークル、郵便局長、消防署、社会福祉協議会(以下「社協」)や行政関係者など、地域の主だった方々です。

私たちは開設当初の平成18年から、地域内の関係者が一堂に会して福祉課題を議論できる「顔の見える関係づくり」めざしてきました。上馬は社協のミニデイ、サロンが区内で一番多い地域ですし、町会の防犯パトロールや高齢者クラブも活発です。学校が地域開放しているスペースや町会、社協が管理する拠点が多くあることに加えて、ほどよい地域のまとまり感と勢いがあります。このような地域の多様な活動が繋がってお互いに協力できる関係になれば、強力なセーフティネットになると考えました。それぞれの立場、役割が認識できるようになるには時間がかかりましたが、3年前から、まちづくりセンター、地区社協との協力体制もできて、地域の輪が育ってきたところです。

今回の会議は11月に続いて、「上馬の見守りを共有しよう」というねらいで実施しました。「犬の散歩をしながら

洗濯物をチェック」「気軽に立ち寄れる居場所があれば」「災害時に備えて日頃の声掛けを」のような身近な活動からの意見。学生からは「イベントも見守りのきっかけ」と、地域行事に協力の申し出がありました。また、「誰がどんな見守りをしているのか、お互い知らない」「改めての見守り、ではなく、日頃挨拶や何気ない会話が大切」「一部の関係者だけでなく、地域に広く浸透させて」という投げかけもありました。

「見守りという言葉が重い」という意見もありましたが、コメンテーターの駒沢大学川上准教授から「徐々に進行してきた無縁社会をすぐに有縁社会には戻せない。『無理せず、気長に、抱え込まない』で、今やっている活動を大切に、自分たちの見守りを作ってほしい」という言葉があり、肩の力が少し楽になりました。寒かった今冬は、例年になく孤立死が続きました。「地域包括ケア」が、超高齢社会の錦の御旗のように言われますが、決して絵に描くようにはいかないというのが現場の実感です。地域のさまざまな力をつなげながら、上馬らしい地域包括ケアを育てていけたらと考えます。(上馬あんしんすこやかセンター N)

